

時代に成立し、中国の「彡」を誤認してできた和字とも、漢字の「二」が崩れて次第に変化したとも説かれ、さらに「同じ」の意を表す「僉」の省文を字源とする説も出されるが、いずれも俄には決めがたい。中国では、先秦時代より漢字列の反復に「彡」「彡」「彡」を用いており、漢字Aの反復に「A彡」のように書き表し、漢字二字以上の文字列ABについては「A彡B彡」「A彡B彡」の二形式が存した。

日本語の踊り字は、この漢字の形が仮名へと及んで発達したものである。

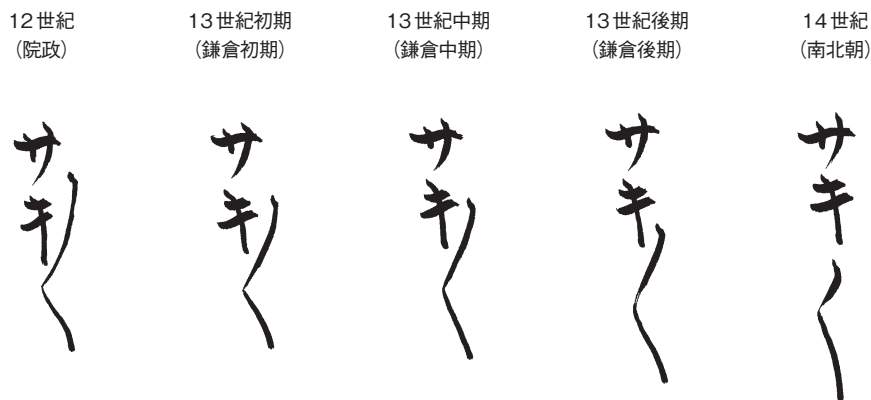
平仮名の場合、当初二字以上繰り返す形式に種々のものがあつたが、連綿の書法が「彡」にも行われて平安時代の10世紀後半には「く」の形が見えるようになる。片仮名では、この形は平仮名よりやや遅れて院政期頃に出

現するようである。

特に、片仮名文の場で用いられた「く」の形は、院政期から鎌倉時代にかけてその起筆位置に変化が生ずるようであり、12世紀から14世紀にかけて、その起筆位置が徐々に下方に移動するようになる(図5-11)。これは、書記労力の軽減を要因とすると考えられている。

また、現代では、IT時代を迎えパソコンが普及するにつれ、電子情報として扱う踊り字の用法が今後どのようになっているかや問題となろう。ワープロソフトの一太郎やワードでは、「々」字は「どう」と仮名で入力すれば変換することができ、それ以外の踊り字は、「彡」「彡」「彡」「彡」「く」「ぐ」が用いられている。

図5-11 踊り字の起筆位置の変遷(片仮名の場合、イメージ図)



第5節

句読点

一つの文の終わりを示すのが句点で、文の成分が直後の成分を修飾しない時に区切りを示すのが読点である。句点は「。」もしくは「.」、読点は「、」や「,」が用いられる。1954(昭29)年に依命通知された「公用文作成の要領」では、横書きの場合の句読点は、「、」と「。」を用いることになっているが、一般日常文では「、」と「.」の組み合わせで書かれることも少なくない。学校教育の現場では通常は「、」と「。」を用いている。

▶読点の打ち方…個人によってかなり幅があり、統一的な表記法はないが、①文の主題を示す語句のあと、②文の中止するところ、③条件や理由をあげる語句のあと、④接続詞や感動詞のあとなど、おおよその目安となる打ち方はある。

▶句読点の起源と展開…日本の句読点の起源は、漢文訓読に求められる。奈良時代の『李善注文選抜書』に文や句の切れ目に「、」を施すのが実際の文献例として最古であり、以後平安時

※2行目「大や」のことはに「さて〜今聞^きましたが。大変なことでござる。何にいたせ。しんだもの、首のないといふは、とあり、続いて「イヤ〜おやぢどの。まづかいさつしやるな。首はあります」とある。句点も読点も同じ「○」の符号を右下に打つ方式。



図5-12 『東海道中膝栗毛』の句読点